

研究活動の背景 ―草地に注目して―

朽木 FS 研究員 今北 哲也

活動の主体

「滋賀県立大学伝統農林業研究会」（彦根）と「火野山ひろば」の構成メンバーによって担われている。「火野山ひろば」は「NPO 市民環境研究所」（京都）に事務局を置き、2005 年 1 月、活動をはじめた。

山や野への火入れを実践している。地元の風土に根ざした「くらしの森」の再生を提案し、実験地を拓くことを目指してきた。びわ湖源流域の村里で取り組んでいる。椋川、余呉、朽木の三箇所である。

<キーワード>くらしの森、火入れ、ホトラ山、原野、焼畑、草地、生き物多様性、獣害、自然再生、山の恵み

1960 年代までのくらしの山をイメージする

「火野山ひろば」がはじまる 2 年ほど前から朽木村針畑谷のおばあさん達と付き合いがはじまっていた。年配者達の身体に染み付いたホトラ刈り体験をせめてイメージだけでも共有したいと私たちは考えていた。村に住むメンバーが 20 年前に採集していた聞き書き記録を手掛かりにした。針畑川源流の山野に展開されてきたくらしの世界を改めて年配者たちから聞くという時間を現地で重ねた。県立大の学生ゼミと組んだワークショップも試みた。おばあさん達を誘い、針畑と縁の深い小浜市の若狭歴史資料館や三方五湖畔の縄文博物館へ研修を企画した。

ホトラ山世界の断片

吹雪の針畑通いが功を奏したのか、ほとんど聞き取りでしか手立てのない私たちの間でホトラ山世界のイメージがようやくおぼろげながらも共有できるようになった。断片を記してみる。

山にコボシ（タムシバ）が目立つ春、苗代の種まきが終わる。山焼きの惣普請に入る。そして火入れ跡。真っ黒な原野から萌え出るヨモギ、ワラビ、ゼンマイ、イタドリ、カヤ、カリヤス、山の草々。その賑やかな光景を想像する。サツキ（田植え）の合間、谷筋をめぐりフキ採りに励むおばあや若嫁達。実にフキは飢饉を凌ぐ大事な糧であった。また、ササユリ咲く梅雨の晴れ間、熊を怖れながらキイチゴをたべ、弁当箱に詰める子供達。やがて土用を迎える。ホトラの主役、コナラの株はじりじり照りつけるおてんとうさんに枝葉をひろげ、女達の刈り干し歌に山は賑わう。草刈山（原野）→牛（厩）→田んぼと、春夏秋冬しごと舞台を移しながら在所にひらける田の土を養ってきた湖西のホトラ山慣習は、1960 年代に入り牛と共に消える。

ホトラ山から木山（キヤマ）へ

百姓のかたちが変わり、田を養う元手の草刈山は不要になった。くらしのかたちも変わりタキモン山は太るにまかせられた。ホトラ山は藪になりおばあ達が嫌った木山にかえていった。林野官は低質林といい、ナラや雑木はスギ、ヒノキに林種転換されていく。若い木山の木漏れ陽にのぞいていたゼンマイも新たな植えスギの陰に消えた。やがて、在所まわりのどこもかしこもスギ山、木山の風景に一変する。1990年代、老猟師には鳴き声も珍しかったシカが目立ち始める。数年を経ず、田、畑、山、つまりは全域がシカだらけの村に様変わりする。サンショウ、クマザサ、ワサビ、ウド、ミョウガ、ゼンマイ、ワラビ、ゴマナ、ヨモギが次々と姿を消す。追い討ちをかけるかのようにナラ枯れが湖西にも広がる。

「山が荒れてきた」といわれて反発を覚えない村の人間はいないだろう。でも、とうとう山は荒れてきたんだ、と感じてしまうナラ枯れの光景だった。立ち枯れあとは倒木である。うっかり山歩きできない。

シカに食い尽くされすっかり見通しが利くようになった林床はどうみても異様である。しかし初めての人にとっては昔からの変わらぬ姿であるかのように映るのかもしれない。針畑入りして1年の青年を湖北・余呉の山に誘った。4月の山裾を被う圧倒的な草々、木々に彼は驚いたのである。

山のたのしみを取り戻す

山菜採りから遠ざかって久しい。それはさびしいことである、と実感する。すでにみてきたようにまわりの山々の木山化とシカの跋扈のせいであることは明らかである。それらが実は人間のワザに因るものだというのもまた在所なかで共通の認識である。

ホトラ山時代の村の人らは一様に山の木の芽や草の葉っぱを食べ慣れ、時によって救荒食糧にさえしてきたからだろうとおもう。どうして消えたのかは、だから愚問なのだろう。

2009年春。雪解けの朽木針畑谷、ある屋敷の一コマである。消えた山菜たちは例えばその家まわりの休耕田や転作田で生き延びている。畑の仲間入りである。ここではフキやミョウガ、ヤマウドである。難しいとされるワサビもみえる。シカの群れはカモシカの餌場を侵した挙句、奥山のワサビは「針畑絶滅危惧種」となったのだ。

雪降りのある日、皆で話を聞かせてもらったホトラ山時代の若嫁は80代である、この家のおばあさんである。元気にヨメのフキ畑やミョウガ畑の世話に出る。キイチゴ採りに遊んだ子供（息子）は一家のあるじになっている。キノコの原木を伐り、ナラ山跡をネットで囲む。

「おばあがうるそうゆうてきかんのや」

「ええゼンマイ山やったさけえ。シカに食われんよう、早うにかこといてくれ。そのうちあっちゃこっちゃからのぞいてくるさけえ」

その近山はかつて草刈り山であった。木山も含め数十年なじんできた山のことである。草を刈り柴を刈りした身体記憶とともに谷々の筋の山の恵み、例えばフキ、ゼンマイがあるからだとおもう。

朽木の記憶と余呉の出会い

2009年8月下旬、私達「火野山ひろば」は余呉の草山に火入れさせてもらうことができた。冬場はスキー場としてつかわれている小高い草地であった。燃え草が十分でなさそう、というわけで私達の師匠でもある地元の永井邦太郎さんの指示で他所から枝條を運び込んだ。火入れ跡、ダイコン、紅カブラなどの野菜を播いた。間引きに入った9月半ば、やわらかそうな草がもさもさとひろがっている。予想はしていたけれど、目の当たりにしてみると感動モノであった。失ってみてはじめてわかる、というわけでカブラ、ダイコン、イタドリ、ヨモギ、ゴマナ、ゼンマイ、ワラビが私の目に映り、作物と雑草の区別さえないほどにワクワクするひとときであった。



写真1 余呉火入れ地の山菜～ゴマナ



写真2 余呉火入れ地の山菜～ヨモギ・フキ・カブラ

草地、原野の世界からくらしの森の実験地へ

シカの勢いにただ押され続け、諦めかげんの事態からは山のたのしみは取り戻せないとなわかってはいるけれど。そんなおもいのなか、未だシカの害がとるに足りない余呉の山によくぞ出会えたと感謝している。

湖西の山々、異様な林床、その惨憺たる風景と対極にあるかのような湖北・余呉の緑。双方の際立った姿が私達のエネルギー源になりそうである。ホトラ世界の山とのつきあい方、焼畑世界の山とのつきあい方。つまるところ、火を不可欠の手立てとして草地、原野を繰り返し造成してきた湖西と湖北。山とのつきあい方をあらためて微に入り細に入りおしえてもらわねばと、つい欲張りになる。

2年間の実践に取り組んで、草地の世界、あるいは原野的世界の位置づけ、価値が少し実感されてきた。それは過度な「森林の時代」に対しもうひとつの「山の世界」を示すことにつながっていくのだろうか。

くらしの森への道筋、そこへ至る実験地の意味が浮き彫りになるように、シカよ！荒らさないで！



写真3 余呉実験地へ収穫した紅蕪と防獣用ソーラー電池



写真4 余呉・火入れ実験地。紅蕪を収穫する中嶋周さん(朽木FSスタッフ・在椋川)